

# 子ども達のエージェンシー

## - インドのスラム地区に暮らす子ども達の事例 -

中 根 智 子

### はじめに

UNDP（国連開発計画）のHuman Development Report 2001（『人間開発レポート2001』）によると、現在、開発途上国に暮らす46億人の人口のうち、8億5,000万人（およそ5人に1人）が非識字状態にあり、約10億の人々が清潔な水へのアクセスなく暮らしている。「第1章：人間開発 - 過去・現在そして未来」では、これまでの成果に対する評価と今後の展望を「Thirty years of impressive progress—but a long way still to go（過去30年間でかなり前進した - しかしまだまだ先は長い：筆者訳）」<sup>1)</sup>としている。このことから、貧困が21世紀に入った現在でもなお（またはこれまで以上に）人類全体に関わる深刻な問題であることが分かる。

以下に引用した通り、UNDPは人間開発を「選択肢の拡大」だと定義している。

Human development is much more than the rise or fall of national incomes. It is creating an environment in which people can develop full potential and lead productive, creative lives in accord with their needs and interests. ... Development is about expanding the choices people have to lead lives that they value.<sup>2)</sup>

（人間開発というものは、国民所得の増減よりも遙かに重要なものである。人間開発とは、人々の必要や利益に従って、潜在能力をいかに発揮でき、生産的で創造的な生活を送ることができる環境を創ることである。 中略 開発は、人々が価

値ある生活を送るために必要な選択肢を拡大することである。：筆者訳)

この理念は、アマルティア・センが提起した「人間的発展アプローチ」がその思想的根源となっている。彼は人間開発や貧困の克服を「剥奪状態 (deprivation)」、 「潜在能力 (capability)」、 「人間的発展」などのキーワードを使って説明する。その際に重要なのが、「持続可能な人間開発 (Sustainable Human Development)」と「行為主体の能動性 (agency)」というふたつの概念である。

「持続可能な発展」がキー・コンセプトとして初めて政策に組み込まれた1992年<sup>3)</sup>以降、環境問題だけでなく人間開発の上でも「持続可能性 (sustainability)」が重要であるとの認識が高まった。それと同時に、1980年代後半から、これまで「開発の一方的な受け手」であった貧困者たちが「開発の担い手」としての重要な役割を演じるようになり、ますます「当事者中心」や「参加型」、「セルフ・ヘルプ」といった開発の新しいステージが展開されるようになった。

中でも、開発途上国の都市下層社会 (いわゆるスラム) に暮らす住民の自立運動は、その最も典型的な事例のひとつだと言えよう。スラム住民自身が貧困と闘いながら自立を目指して活動し、国内外からNGO団体などがその活動をバックアップしている。また、こうした一連の運動やそれに関わる行政の対応などについての著書が1990年前半から数多く出版されている事実は、それを裏付けている。

しかしながら、こうした活動に参加する主体的「スラム住民」として描かれるのはおとな達ばかりで、子ども達の存在はいつもその後ろに隠されてきた。「スラム・コミュニティの構成員」としての子ども達に焦点を当てた研究は極端に少ない。貧困に纏わる子どもの問題としては、児童労働やストリートチルドレン、子ども買春、児童ポルノなどが挙げられるが、これらはどれも子どもの「被害者」としての側面を強調するもので、その主体性にはほ

とんど触れてこなかった。

筆者はすでに前論にて、インド・カルカッタ市内のスラム地区に暮らす子ども達の事例を使って、いかに子ども達がコミュニティーの機能に組み込まれ、必要不可欠な構成員としてその維持に貢献しているかを明らかにした〔中根、2001〕

概して、子どもがおとなよりも不利な立場に置かれ易いことは言うまでもない。先の「持続可能な人間開発」に続いてセンが打ち出した「人間の安全保障」という概念においても、「貧困層の子どもは、安全と人権を脅かされている最大規模のグループである<sup>4)</sup>」と、甲斐田は言う。ここで改めて述べるまでもなく、危機に直面している子ども達の現状は想像を絶するほど厳しく、構造的な暴力のもとで「剥奪状態」に置かれていることに疑いの余地はない。

しかしながら、貧困者として暮らす子ども達は、一方で「犠牲者」でありながら、他方ではおとなと同様に主体性をもって行動できる（する）存在でもある、と筆者は考えている。彼ら/彼女らは、周りの環境や条件が許す範囲内で、生活を善くする努力をしたり、わずかながらでも自分の将来のために投資したりする。こうした行為は、紛れもなくセンの言う「エージェンシー」と合致する。

そこで筆者は現在、インド・カルカッタ市内のスラム地区に暮らす子ども達の日常生活におけるさまざまな断片から、彼ら/彼女らの主体性が発揮された行動を明らかにし、開発途上国の都市における貧困の克服に子ども達自身が「エージェント」としていかに有効に関与できるかという課題に取り組んでいる。よって本稿は、そのための一歩として、現地調査で収集した資料を整理し、フィールド・ノートとしてまとめたものである。なお、本稿で紹介している資料は、2000年9月と2002年5月の2度に渡って収集したものである。

## 資料1 . 内職に励むF.J. (12) のケース

カルカッタ市内のスラム街(ムスリム・コミュニティー)に暮らすF.J.は、12歳の快活な少女である。両親と5人姉弟の7人家族で暮らしている家には、部屋がひとつしかない。部屋の中にある大きな家具はベッドだけで、その上下に鍋や生活雑貨が積まれている。唯一電気照明はあるが、テレビやラジオ、ファンなどの電化製品はない。5人姉弟は、12歳の長女F.J.、11歳の妹、9歳の弟、7歳の弟と4歳の妹で構成されている。父親はコミュニティー内にある作業所で紙製の箱を作る仕事に就いている<sup>5)</sup>。母親は主婦で、食事の支度や洗濯、水汲み(飲み水用)など、家庭内の一切の家事を行っている。近所の人と共同で使っている井戸の水は、洗濯や水浴びには使うが、飲み水としては適していないので、飲料水は毎日朝と夕方の2回給水所まで取りに行っている。

F.J.は現在、公立学校の6年生だが、NGO団体が運営する非公式の教育施設(Non-Formal Educational Center :NFEC、以下「NFEC」または単に「センター」と呼ぶ)にも通っている。もともとは、5歳ごろからNGO団体のセンターに通い始めた。読み書きを習うことと食べ物をもらうことがその目的であった。母親に連れてこられて通い始めたセンターで友達もでき、一緒に歌や劇を練習したり、文字を習ったりすることがすぐに好きになったとF.J.は語る。両親の意向やコミュニティー内の規範が相まって、自由な外出があまり許されない少女にとって、センターは家事や姉弟の世話から解放され、先生たちに優しく話を聞いてもらえる貴重な空間であった。その上、食べ物がもらえるという特典まで付いていて、空腹のお腹を満たすことができた。

F.J.が7歳になると、センターの先生たちは公立の小学校へ行けるよう手続きをとってくれた。公立学校の授業料は無料だが、実際に通うとなると教材代、電気代、掃除代、施設維持費などの名目で学校への支払いが必要となる。インドでは非就学児童や中途退学児童のほとんどが、これらの代金を払えな

いことが理由で学校に行けなかったり、中途退学を余儀なくされたりしている。F.J.の場合は、センターを運営しているNGO団体側が、通学に必要な文具、ノート、衣類を提供してくれた。しかし、それでも彼女が所有しているのは、教科書とノート1冊のほかに、鉛筆3本と衣類2着だけである。

F.J.の1日は、午前5時の起床から始まる。起きるとすぐに身支度を整え、トイレを済ませ、給水所まで飲み水を取りに行く。F.J.の家庭では、朝の水汲みはF.J.が行い、夜の水汲みは彼女の母親が行なうのが日課となっている。水汲みから戻ると、昨夜食べた夕食の残りのルティー（薄焼きパン）を1枚かじって、公立学校へと登校する。彼女が通う公立学校の授業時間は、午前6時から10時までの4時間（授業は4コマ）で、放課後すぐにNGO団体が運営するセンターへ行く。センターの開講時間は午前9時30分から正午までなので、F.J.がセンターへ着く頃には、すでに授業が始まっている。「授業が始まっている」と言っても、机も椅子もない小さなプレハブ小屋に30人ほどが座って、配られた小さな黒板（ノートの代わり）に文字の書き取りや計算の練習をしているだけである。そこでF.J.は、センターでの授業（読み書きや計算、歌や劇の練習）に加えて、公立学校で習ったことの復習をする。分からない点は、センターの先生たちが教えてくれる。

このように、F.J.は公立学校とセンターというふたつの教育施設を非常にうまく使いこなしている。彼女にとっては、たとえ公立学校に通っていても、無料で学べ、公立学校へ通う手助けをしてくれて、しかも食べ物もくれるセンターを辞める必要はどこにもないし、そんな気にもならないのである。むしろ、公立学校とセンターというふたつの空間を相互補完的に利用することが、自分自身にとって最も有益だと判断した。

正午にセンターの授業が終わると、パンとゆで卵をもらって帰宅する。もらった食べ物はすぐに平らげ、家でようやく一息つく。そして、お金がある日には2時ごろ昼食を食べる。メニューは大抵ご飯とジャガイモのカレーである。料理は母親が行なうが、一部屋しかない家にはキッチンがなく、いつ

も家の入り口前に鍋を出して、そこにしゃがんで調理する(写真参照)。昼食後は、洗濯や部屋の掃除など、母親の家事を手伝ったり、本を読んだり、家の中で友達と遊んだりして過ごす。そして、週に1度は午後5時から7時まで、家庭教師の家で英語を習う。友達が習っているのを知って、自分も習いたい、と2002年2月頃そこに参加した。公立学校では、授業中、質問に答えられないと怒られたり、ひどい場合には殴られたりすることがあるので、少しでも学校の授業に追いつけるように、と考えて個人授業を受けようと決めた。友達2人と一緒に英語を習って、月謝はひとり1ヶ月17ルピー(43円)かかる。この17ルピーという新たな出費をF.J.の両親は快く思っていない。なぜなら、毎日の食事も間々ならない家庭にとって、たとえ17ルピーといえども余分な出費は家計を大きく圧迫するからである。ただ、教育の大切さを十分に理解しているがゆえに、両親にとってはその17ルピーが悩みの種となっている。

英語の個人授業を受けようかと考えている頃、F.J.は大きな紙の束を持って近所の家へやって来る男性を見かけた。以前にも何度か見かけたことはあったが、これまでは特に気に留めていなかった。しかしその後、近所の人の話から、彼はその家に内職の仕事を持って来る男性であることを知った。F.J.は「これだ!」と思った。そして、次に男性が現れた時、F.J.は躊躇いがちに「私もその仕事がしたい。」と言った。両親の承諾はすでに得ていたし、男性との交渉はすべてひとりで行なった。

男性との交渉を無事に終えたF.J.は、蚊取り線香の取扱説明書を一枚ずつ箱に入る大きさに折りたたむ内職を得た。そこで、F.J.は友達4人を集めて内職のためのグループを作った。F.J.のような子どもに限らず、こうした助け合いは、コミュニティー全体を通して貧困者同士のインフォーマルな相互扶助システムとしてよく見受けられる。

男性は週に1回(多い時は週に2回)取扱説明書およそ5,000枚を抱えてF.J.の家へやって来る。F.J.らは5,000枚をひとり1,000枚ずつに分け、それぞれ

の家へ持ち帰る。請け負った仕事は次の日までには仕上げる約束になっているため、少女たちはその日の夕食後、寝るまでの時間を使って内職に励む。仕事を始めた頃は1,000枚の取扱説明書を折りたたむのに、およそ1時間30分かかっていたが、最近ではずいぶん仕事にも慣れ、約1時間で仕上げるできるようになった。一度の仕事に対して支払われる賃金15ルピー（38円）もF.J.の責任において、平等に5人で分ける。ひとり3ルピー（7.5円）という小額ではあるものの、こうして収入が得られることは、少女たちの自立を助けるだけでなく、自尊心の糧ともなっている。その証拠に仕事について語る時のF.J.はとても誇らしげではつらつとしている。

両親はF.J.の内職のことを好意的に受け止めており、彼女の収入を家計に還元するよう求めることはしていない。ただし、英語の個人授業を受けるための費用17ルピーは、F.J.と両親が半分ずつ出し合う約束をしたので、F.J.は内職で稼いだお金のほとんどをこのために使っている。残りは、フルーツやお菓子を買って食べるために使う。

F.J.に関して特筆すべきは、自分の置かれた状況を正しく把握し、その状況を好転させるために、周りの環境をうまく利用しながら、具体的実践を行なっている点である。たとえそこに経済的な困難さがあっても、自ら内職を見つけ、12歳にしておとなと対等に交渉し、仕事を得、仲間を組織して物事を進めていく行動力は注目に値する。公立学校とNFEC（センター）を彼女なりに使いこなし、さらに友達と一緒に英語の課外授業まで受けている点には、学ぶことへの積極性と向上心が見られる。言うまでもなく、一般に子どもはおとなより、女子は男子より不利な立場に置かれやすい。ポロポロの服とほだしの足からは、明らかに貧困者であることを示しているが、それでもなお「犠牲者」というイメージは似合わない。

総じてF.J.は、自分にとって何が大切か、何が問題なのか、そしてその問題への解決策はどうしたらよいのかを誰よりもよく理解している。夜、7人の家族がひしめき合う狭い部屋の中でせっせと蚊取り線香の取扱説明書を折り

たたむF.J.の姿はととも「けなげ」に映るが、その内には自分が置かれた状況に適應する「しなやかさ」と、それに合わせて自らの手で道を切り開いていく「したたかさ」が見え隠れする。

## 資料2 . 村を出たS.H. (11) のケース

別のスラム地区に暮らすS.H.もF.J.と同様に活発で明るい少女である。カルカッタからバスでおよそ4時間の所にある農村に住んでいたS.H.は、祖父母のいるカルカッタを両親と一緒に訪ねたことがきっかけで、すっかり都会の生活が好きになった。そこで両親に頼みこみ、カルカッタ市内のスラム地区にある祖父母の家へひとりで移り住んだ。S.H.が9歳の時のことである。

現在では、その家に祖父、祖母、曾祖母と11歳になったS.H.の4人で暮らしている。村には、S.H.の両親と10歳の妹、4歳の弟が今でも住んでいるが、S.H.は村を出て以来まだ2回しか帰省していない。電気、ガス、水道のない農村で生まれたS.H.にとっては、カルカッタがとても華やかで豊かな街に映った。祖父母がいるとは言え、両親や兄弟と離れて、カルカッタへひとりで移り住んだ理由についてS.H.は、「だって村の夜は真っ暗なんだもん」と無邪気に答える。カルカッタには、電気があって夜でも明るいし、暑くてもファンを回すことができる。人は大勢いるし、大きなマーケットではたくさんの物が売られている。そういった意味で、S.H.は「村には何も無い」と言う。

「第三世界の大多数の人びとは農村部に住み、農村の貧困こそが急激な人口移動による『過度の』都市化とそれゆえの都市問題を招く<sup>6)</sup>」と言われるほど、仕事を求めて、親類縁者のいる都会へ農村からやって来る人々は後を絶たない。しかし、こうしたケースでは、移住は働き手である親が中心となった家族単位かまたは家族を村に残したまま単身でやって来る出稼ぎ労働者がほとんどである。S.H.のように、わずか9歳の少女が自発的理由によって単身で移住するケースはめずらしい<sup>7)</sup>。

S.H.の祖父は、路上マーケットでタマネギやナスビなどの野菜を売る仕事をしている。祖母とS.H.は一緒に2軒の家でメイド(Maid-Servant)として働いているが、祖母が病気の時には、S.H.がひとりで働きに行く。祖母がマラリアにかかった時は、ひとりで2人分の仕事をこなさなければならず、S.H.はしばらく学校に行けない日が続いたこともあった。曾祖母は高齢のため、現在は働いていない。メイドの仕事は1軒につき2時間ほどで、食器洗い、部屋の掃除、子どものお守り、その他の雑用などを行なう。仕事先の家はそれぞれ歩いて20分ほどの場所にあり、お昼に1軒、夕方からもう1軒に行く。働くのは週7日で、週末などの休みは基本的にない。S.H.はカルカットに引っ越してきて以来ずっと、メイドの仕事を続けている。それでも賃金はすべて祖母が受け取るため、S.H.は働いてもその分の報酬をもらっていない。S.H.は、最近このことに不満を抱き始めており、できれば自分の現金収入につながる仕事を何かしたいと考えている。

S.H.の祖母は、長年コツコツと貯めたお金で1年前に念願のテレビを買った。これまで家にあったのは、電気照明とファンだけだったので、このテレビは近所にも誇れる3つ目の電化製品となった。祖母が家にいて許可が得られると、S.H.はテレビでアニメを見ることができる。何よりも楽しい時間だが、村に暮らしてはこうした願いも叶えられないままだったろう。

しかし、たとえ祖母がテレビを購入したからといって、彼女たちに経済的余裕があるわけでは決していない。家は部屋がひとつあるだけで、玄関にはドアもなく、ただカーテンのような布がぶら下がっている。部屋のほとんどを占領しているベッドでは、S.H.と祖母と一緒に寝る。高齢で身体の不自由な曾祖母は、昼間から床に寝た(と言うよりはむしろ「転がった」)ままで、あまり動かない。祖父は、部屋にスペースがないので玄関先の路上で每晚眠る。

S.H.はテレビを見るようになってからというもの、スクリーンの中の華やかな俳優たちにすっかり魅了されてしまった。しかし、S.H.の衣類は、もらい物が2着あるだけで、それらを交互に着回しているのが現実である。スクリー

ンを挟んだ世界の違いはよく理解している。それでも、テレビの中の豊かな世界と自分が生きている貧しい現状とのギャップに落胆するというよりはむしろ、華やかで美しい世界への憧れを募らせている。テレビを見て思うことは、「私はこんなに貧しいのに、不公平だわ」ではなく、「私もお化粧品して綺麗になりたい」である。経済的状況とは無関係に、あくまでも11歳の少女らしい感情を素直に表現する。

S.H.も先述のF.J.と同様に、NGO団体が運営するNFEC（非公式な教育センター）と公立小学校の両方に通っている<sup>8)</sup>。カルカッタへ引っ越して来て間もないある日、NFECで先生をしている女性が家に訪ねてきて、センターに来ようS.H.を誘った<sup>9)</sup>。村で学校に通った経験のあったS.H.は、また勉強が始められるし、食べ物ももらえるというセンターへぜひ行きたいと思った。友達ができるかもしれないという期待もあった。すべて無料だということで、祖父母も快く承諾し、むしろ勉強することをS.H.に強く勧めた。センターでの授業は、文字の書き取りだけでなく、歌や劇、踊りの練習もあるのでとても楽しい、と彼女は言う。積極的で明るい性格のS.H.はすぐにほかの生徒とも仲良くなり、今ではすっかり「お姉さん役」で、いつも前列の真ん中に陣取って座るほどである。センターの先生たちは、S.H.にも公立の小学校へ入れるよう手続きを取ってくれた。カルカッタへ来る前に就学経験があったことが認められて、S.H.は公立小学校の3年生に編入することができた。2002年4月からは、5年生に進学したばかりである。向学心あふれるS.H.は、できることならこのままずっと勉強を続けたいと考えている。「将来の夢はなに？」という質問に対してS.H.は、はにかみながらも「医者」と答えた。ただし、勉強を続けるにはそれを支える経済力が必要になる。就学資金の問題は、メイドとは別の仕事をしたいと考えている理由のひとつでもある。

以上のように、S.H.はとても積極的で好奇心旺盛な性格である。S.H.は自分が何をしたいのかをよく知っているし、それを実現するにはどうしたら良いかを考え、そして自己の主張をはっきりと周囲に表現することができる。9

歳で都会への憧れを抱き、両親や妹弟のいる村を出た勇気と決断力はあなどれない。村の生活から見た都会の生活への憧れ、その次はテレビに登場する華やかで美しい世界への憧れ、という羨望の移り変わりは、常にS.H.の向上心を刺激してきたと言える。

より豊かで華やかな世界の存在を知った時、S.H.は自らの現状と比較してシヨンボリしたりしないし、僻んだりもしていない。経済的な貧しさを誰かのせいにして責めたりしていないし、かと言って未来を諦めているわけでもない。つまり、S.H.の心を占めているのは、暗い悲嘆や鬱積した不満ではなく、羨望とそれに近づくための希望である。S.H.の日常は、むしろ豊かな世界に対する憧れで輝いていると言っても過言ではない。

### 資料3 . 自転車に乗る練習をするT.M. (11) のケース

11歳の少年T.M.は、川沿いの土手に作られたスラムで暮らしている。土手は坂になっていて、上は道路、下は川に挟まれている。土手や川の中州のように、土地の所有者がはっきりしない都市の空間に掘っ立て小屋を建てて「不法占拠」する住民は多い。もちろん、強制撤去に遭うこともしばしばだが、警官が立ち去ると、すぐに元の掘っ立て小屋が復元される。

T.M.の家は、土手上方の道路側から下って2軒目にある。急な斜面になっている上に、川縁なので足場が悪く、ぬかるんでいる。掘っ立て小屋は、周りを藁と木の枝で囲って、その上に藁葺きの屋根を乗せたただけのもので、中には鍋や釜などの調理器具が置かれている。もちろん、電気・ガス・水道へのアクセスはない。水は給水所まで取りに行き、暗くなるとランプをともす。夜はベッドの代わりに布を敷いて床に寝る。電化製品は唯一ラジオがある。電気が通っているスラム<sup>6)</sup>(先述のF.J.やS.H.が暮らしているようなスラム)の中には、大抵テレビを持っている家がある。そこでテレビを持たない家の子どもは、友達の家でテレビを見せてもらうことがよくある。しか

し、T.M.が暮らしているスラムは、上記のスラムよりさらに経済的困窮が厳しい住民が多く、T.M.はテレビを見たことがない。

家族は、父、母と16歳の姉、14歳の兄と13歳の兄とT.M.の6人だが、16歳の姉は最近結婚して家を出たので、現在は5人で暮らしている。働き手として家計を支えているのは、父親と2人の兄たちで、父親は藁葺きの屋根を作る仕事、一番上の兄は窓の格子を荷台付き自転車で製造元から販売店まで運ぶ仕事、二番目の兄はルティー（薄焼きパン）を焼くための鉄板を作る仕事をそれぞれしている。

T.M.はNGO団体が運営するセンター（NFEC）に通っているが、公式な学校（Formal School）などには一度も行ったことがない。センターへは5年前から通い始めたが、途中2年間はNGO団体が資金不足を理由にセンターを閉めてしまったために、その間は教育を受けることも食べ物を無料でもらうこともなかった。T.M.はセンターが再開されたことを嬉しく思っているし、毎日楽しく通っている。しかし、勉強する場所はセンターだけで十分だと考えていて、今のところ特に公立学校へ行きたいという願望はない。センターの先生たちも無理にT.M.を公立学校へ行かせようとはしない。

1ヶ月ほど前から始めて、最近ずっとT.M.が熱中していることは、自転車に乗る練習である。毎日30分間だけ自転車屋さんで子ども用自転車を借りて練習をしている。一番上の兄が荷台付き自転車で窓の格子を運ぶ姿を見て、T.M.も自転車に乗れるようになりたいと思った。自転車に乗れるとカッコいいし、就ける仕事の幅も広がる。母は特に後者の意見に賛成し、T.M.に自転車に乗る練習をするよう薦めた。自転車を借りる代金は、30分で5ルピー（13円）かかる。その5ルピーをT.M.は毎日自分で稼いでいる。以前から（T.M.自身も思い出せないほど幼い頃から）続けている水汲みの仕事は、バケツ1杯分の水を水汲み場から運んで1ルピーもらえる。1日平均5ルピーの稼ぎ（バケツ5杯）だが、時々6～7杯の水を運ぶこともある。しかし、母親にはその日の稼ぎとして毎日5ルピーを渡し、余ったお金は内緒でフルー

ツやお菓子を買って食べるために使っている。母親はT.M.が持ち帰る5ルピーをそのまま彼の自転車練習代に当てているため、T.M.は事実上、代金を自分で稼いでいることになる。しかし、仕事が少なくて稼ぎが5ルピーに満たない日でも母は自転車に乗るための5ルピーをくれる。

自転車に乗る練習は楽しい。雨の日以外はほとんど毎日練習している。実際のところ「練習」というよりはむしろ「自転車で遊んでいる」と言った方が適切だろう。兄のように荷台付きの自転車があれば、水運びの仕事も今よりもっと楽に、より多くの量を運ぶことができ、その分稼ぎも増えるのではないかという目論見もある。

T.M.は将来、医者やビジネスマンなどになりたいとは考えていない。日々の生活の中でも目標を高く設定してひたすらそれに向かって邁進するのではなく、むしろ将来の自分の姿を現在の兄たちや父親に重ね合わせている。裕福な暮らしがしたいという願望に想いを馳せたり、実際にできるという可能性に向かって努力したりするのではなく、ただぼんやりと昨日や今日と変わらない日々がこれからも続いていくのではないかと考えている。経済的な豊かさへの憧れがないというわけではないが、現実問題として「自分がある日突然大金持ちになるようなミラクルは起こり得ない」と言う。

T.M.はNFECへ通っていて、特にそれ以上の教育を望んではいないので、向学心はそれほど高くないと言える。ただし、そこには父親や兄たちの現状から鑑みて描く、自分の将来像が多かれ少なかれ影響している。公立学校で正式な教育を受けるのではなく、自転車の練習を選ぶのは、彼なりのより現実的な選択だと捉えることができる。かと言って向上心がまったくないわけではなく、自転車の練習に自発的に取り組んでいる点からは日常生活に対する前向きな姿勢がうかがえる。荷台付きの自転車があれば今よりもっと多くの仕事がこなせて、収入も増えるという発想は、善い生活(well-being)がしたいという願望の表れだと言える。水運びの仕事で少し多めに稼げた日には、家族に内緒でお菓子や果物を買って食べるという密かな楽しみもまた、T.M.

なりの生活の工夫である。

資料1.と資料2.で紹介したF.J.やS.H.と比べて、T.M.にはそれほどの「エージェンシー」が見られないと判断するのは誤りである。F.J.やS.H.はT.M.より行動が大胆で、日常生活における変化もより多様性に富んでいるように見えるが、それは単に選択の内容に差異があるだけであって、T.M.の実践における能動性を否定するものではない。つまり、T.M.が現状を追認する選択を行なったとしても、それが彼自身による判断である限り、それは彼の主体的行為であり、日常生活における戦略なのである。

## おわりに

今まで紹介してきた資料は、いずれも断片的なもので、各個人や彼/彼女らが暮らすスラムを包括的に把握できる内容のものではない。しかし、それでもなお、F.J.、S.H.、T.M.それぞれの日常生活におけるさまざまな一場面や肉声は、彼/彼女らがいかにかつ主体的かつ戦略的に生きているかを伝えている。

F.J.、S.H.、T.M.は、それぞれカルカッタ市内にある別々のスラムに暮らしている。各々のスラムは、その間を行き来するのに車で20~30分ぐらいの場所に位置している。資料1.と資料2.で取りあげたスラムは、住民が居住に関して何らかの法的根拠をもっているが、建物の老朽化が進んでいるタイプのスラムで、資料3.は住民がもともと住宅用ではない土地に何の法的根拠もなく住み続けているタイプのスラムである。しかし、3地区ともに環境が不衛生な点、アメニティーが整備されていない点、住民の多くが経済的に貧しく、社会的地位も低いとされている点は共通している。

資料全体を見渡すと、F.J.は自身の願望を行動によって実現させている度合いが高い。英語の個人授業を受けたい、費用がかかる、家計が余分な出費を許さない、内職して自分で稼ぐ、という一連の流れは首尾一貫して彼女の自己実現に向けられている。S.H.は、自身の憧れる暮らしにより近づくために行

動し、実際にある程度まではそれを実現させている。しかし、独自に収入を得られる仕事をしたいと願いながらも、まだその実現には至っていない。T.M.においては、自ら自転車に乗る練習をしている点に積極性と戦略が見受けられるが、前者ふたりと比べても明らかなように、将来の見通しに関してはより現状を追認する考えをもっている。

これら3人の「潜在能力」は三者三様で、それぞれの現状認識や将来の展望にはグラデーションがあると言える。だが先述の通り、「エージェンシー」とは、意思決定（decision-making）の内容ではなく、そのプロセスを指す概念である。よって、資料1、資料2、および資料3からF.J.、S.H.、T.M.それぞれに「エージェント」としての素養を結論付けても良いのではないだろうか。

しかしながら、彼/彼女らの主体的行為がどれも「剥奪状態」の中から生まれていることを見逃すことはできない。たとえば、T.M.がより現状を容認する姿勢をある種の「諦め」と捉えることも可能である。この点にはまだ議論の余地があるだろう。「エージェンシー」を鍵にして、いかに子ども達自身が貧困を克服できるかという可能性の検討を今後の課題としたい。

## 注

- 1) *Human Development Report 2001*, Chapter 1, p.9, Oxford University Press, 2001, New York
- 2) 前掲 p. 9
- 3) 1992年にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された地球サミットにおいて、具体的な行動計画「アジェンダ21」に「持続可能な発展」の概念が組み込まれた。
- 4) 「子どもと人間の安全保障」 甲斐田万智子 p.161 『グローバル化と人間の安全保障』 勝俣誠編著 日本経済評論者 2001年
- 5) F.J.が暮らすコミュニティには、製本所や洋裁所のほかに、革靴やベルトなどの革製品を作る作業所が集まっている。また、できあがった製品を入れて売するための箱を作る作業所も併設されており、住民の多くがこれらの仕事に携わっている。
- 6) 『アジアの街わたしの住まい』 穂坂光彦 1994年 明石書店
- 7) 農村から都市へ単身で移動する人口の中には、都市で「ストリートチルドレン」となる子どもも含まれる。また、その大多数は5～14歳ぐらいの男子である。

- 8) S.H.とF.J.は、同じNGO団体が運営する別々のNFECに通っている。
- 9) 本稿で紹介しているNGO団体(IRMA)の職員は、定期的に地域を巡回し、学校に行っていない子どもに声を掛けてはセンターへ来るよう誘い、親に対しては教育の大切さを説いて回っている。
- 10) 電気が通っているとって、勝手に近くの電柱から電線を引っ張ってきて盗電している場合もあるので、必ずしも電気が合法的に設置されている地区とは限らない。

### 参考文献リスト

- アンソレーナ、ホルヘ・伊従 直子(共著) 1992 『スラムの環境・開発・生活誌 アジア、ラテン・アメリカにひろがる貧困と民衆の自立』 明石書店
- 江口 信清(編) 1998 『「貧困の文化」再考』立命館大学人文科学研究所叢書10 有斐閣
- 甲斐田 万智子 2001 「子どもと人間の安全保障 子ども参加に焦点をあてて」 161-187頁 勝俣 誠(編著)『グローバル化と人間の安全保障 - 行動する市民』 日本経済評論者
- セン、アマルティア 2002 『貧困の克服 - アジア発展の鍵は何か』 大石りら(訳) 集英社
- 鶴見 良行 1982 『アジアはなぜ貧しいのか』 朝日選書211 朝日新聞社
- 中根 智子 2001 「『ストリートチルドレン』の現状分析~インド・カルカッタ市内の3つのスラム街から~」 『南方文化』 天理南方文化研究会
- 藤巻 正巳(編) 2001 『生活世界としての「スラム」 外部者の言説・住民の肉声』 古今書院
- ノラスコ、シンシア 1994 『フィリピンの都市下層社会』 アジア社会学セミナー(訳) 明石書店
- 穂坂 光彦 1994 『アジアの街わたしの住まい』 明石書店
- Amartya Sen, 1981, *Poverty and Famines: An Essay on Entitlement and Deprivation*, Oxford University Press, New York
- , 1999, *Development As Freedom*, Oxford University Press, New York
- Amartya Sen / Jean Dreze (eds.), 1999, *The Amartya Sen and Jean Dreze Omnibus: Comprising Poverty and Famines, Hunger and Public Action, India-Economic Development and Social Opportunity*, Oxford University Press, New Delhi
- G.K.Ghosh / Shukla Ghosh, 2000, *LEGENDS OF ORIGIN OF THE CASTES AND TRIBES OF EASTERN INDIA*, Firma KLM Private Limited, Calcutta
- Lakshmidhar Mishra, 2000, *Child Labour in India*, Oxford University Press, New Delhi
- Lewis Apteekar, 1994, 'Street Children in the Developing World: A Review of Their Condition', Cross-Cultural Research, Sage Publications

- Louis Dumont, 1980, *Homo Hierarchicus: The Caste System and Its Implications*, (Transl. By M. Sainsbury), Chicago University Press, Chicago
- Murari Ghosh / Alok K. Dutta / Biswanath Ray, 1972, *CALCUTTA: A Study in Urban GrowthDynamics*, Firma KLM Private Limited, Calcutta
- Oneil Biswas, 1992, *Calcutta and Calcuttans: From Dilhi to Megalopolis*, Firma KLM Private Limited, Calcutta
- Pradip Sinha, 1987, *Calcutta in Urba History*, Firma KLM Private Limited, Calcutta
- The Probe Team, 1999, *PUBLIC REPORT ON BASIC EDUCATION IN INDIA*, Oxford University Press, New Delhi
- UNDP, 2001, *HUMAN DEVELOPMENT REPORT 2001 - Making New Technologies Working for Human Development*, Oxford Univerity Press, New York
- West Bengal State Resource Group for Education of thDeprived Urban Children, 2000, *CALCUTTA'S DEPRIVED URBAN CHILDREN: A SURVEY*, not published

## 添付資料

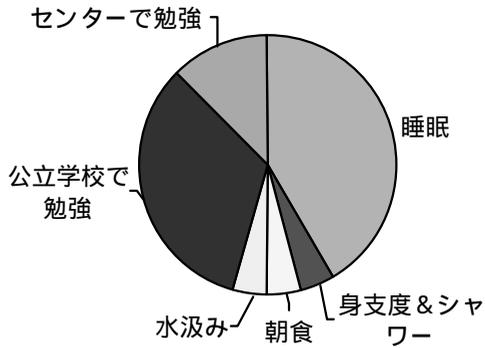


図1 - 1 F.J.タイムテーブル午前中

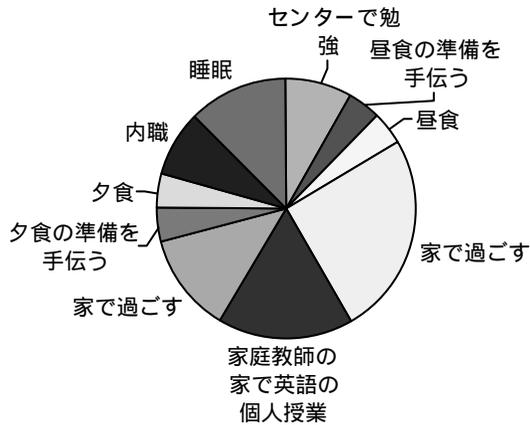


図1 - 2 F.J.タイムテーブル午後

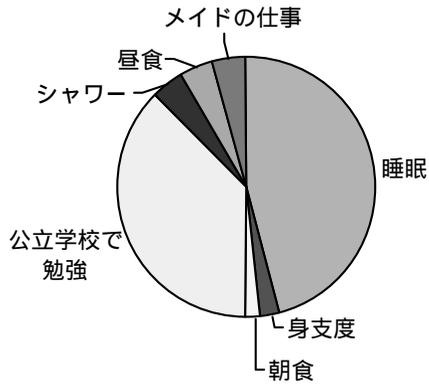


図2 - 1 S.H.タイムテーブル午前中

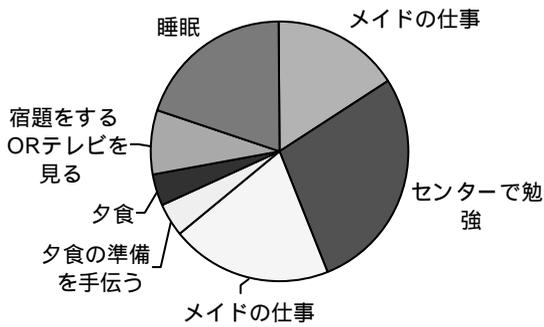


図2 - 2 S.H.タイムテーブル午後

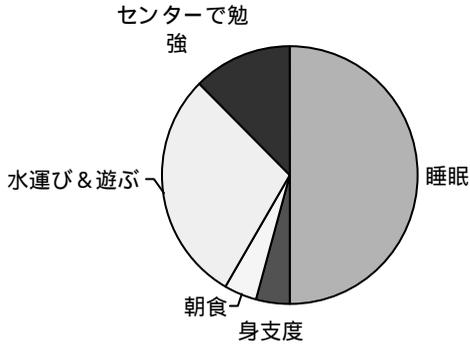


図 3 - 1 T.M.タイムテーブル(午前中)

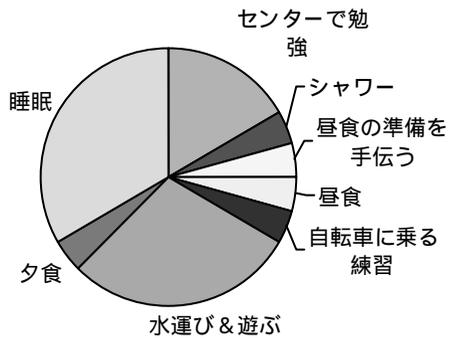


図 3 - 2 T.M.タイムテーブル午後

添付資料・写真



写真1 . F.J.が暮らすスラム  
(前方を歩いているのがF.J.) : 著者撮影



写真2 . 水汲み場 : 筆者撮影